

新刊紹介

河村幹夫著

『ドイルとホームズを「探偵」する』

中西 裕

シャーロック・ホームズ物語六〇篇を書いたアーサー・コナン・ドイルは昨年生誕一五〇年、今年没後八〇年を迎えて、相変わらず根強い人気を誇っている。本書はその魅力を伝える一冊である。

河村氏は作者ドイルと、作中の人物であるホームズをとりあげて、楽しく両者の謎に迫ろうとする。教条的なシャーロキアンはホームズの実在をしっかりと信じ込み、物語は相棒のワトスンが書いたもの、ドイルなどという人物はワトスンの著作を出版社に持ち込んだ出版代理人に過ぎないと見なしたふりをするお約束になっているのだが、氏は日本の代表的シャーロキアンながら、創作の世界からは距離を置いて論を進める。したがって、ここで探偵されるのは主としてドイルの謎であることになる。軸足をそこに置いて、物語の時系列



2009年1月8日発行
日本経済新聞出版社
新書判 192頁
定価 850円（本体）

的な流れとドイルの人生の軌跡を重ね合わせながら、「人と作品」が総合的に論じられる。

著者はまずアーサーの父チャールズについて、芸術家の素養を受け継いだ兄弟の中でただひとり「はぐれ」で、酒乱のため治療院送りとなったことなどを紹介する。影のある父親のもとで成長した息子はやがて医師となる。紆余曲折の末、ようやく軌道に乗りかけた医療のかたわら、ドイルはホームズ物語を書き始める。挿入されるエピソードが興味深い。例えば、ホームズのモデルにした大学時代の恩師ベル教授が秘かに警察のコンサルタントをしていたとの事実には驚くことになるだろう。

こうして書かれた『緋色の研究』（初出 一八八七年）の人氣は「いまひとつ」だった。これは長

編としての内容が整っていなかったこと、無名の著者の作で、しかも挿絵（D・H・フリiston）が稚拙だったのもその原因だと分析する。翌一八八八年刊の単行本の挿絵は父チャールズが描いた。これも稚拙な出来であったのだが、著者はドイルの短篇「ガスター・フェルの外科医」の描写を手がかりにチャールズの足跡をたどり、彼が挿絵を描いた時期をスコットランド東北部のアル中専門の治療院に収容されていた頃であると推定する。このあたりは該博な知識が駆使されている。

ドイルは不評にもめげずにホームズ物語の連続短篇を書き始め、ようやく人氣を得るに至る。その要因を著者は次のように推定する。事件発生と掲載との間の時間差が少なく現実感があること、シドニー・パジェット描く挿絵のホームズが颯爽としていたこと、読み切り連載の新しい手法、その背景にある鉄道網の拡大も車中で読める雑誌の売れ行きを促進した。それにドイルの筆致の魅力、加えて大衆の上流社会のゴシップへの関心……。長じてホームズ物語を読むと、子どものころに読んだ時とは違って、大英帝国の影の部分やヴィクトリア朝の社会事情、あるいはイギリスの田園

風景に魅せられたりもする。そんな多様な受容のしかたにも本書は気づかせてくれる。

最初の妻ルイーザは病魔に襲われ、一三年間の闘病の後に命を失う。ドイルは献身的に尽くしたが、それは対等な夫婦の精神的な絆から生まれる愛の形というよりも、騎士道精神に基づいた、愛する女性の守護者としての責務を果たすという価値観によるのではないかと著者は言う。『自伝』の中で妻の死が半ページにも満たないことに違和感を持つ著者の直感である。実はルイーザの発病から四年後に、後妻となるジーン・レッキーと出会い、交際が始まっていた。ルイーザは「不倫」を知っていたのではないかとほめかされている。

ホームズは徹底した動機重視型の勧善懲悪主義者だった。そう著者は語り、善か悪かの判断基準は法ではなく、自身の判断を重視する主義が一般大衆に大受けした。当時の法的判断が治安判事などによって恣意的に行われていた事情が背景にはあるのだそうだ。

引退後に引っぱり出されたホームズは、第一次世界大戦の前夜にひと働きする。「最後の挨拶」の事件解決に際して、ホームズがワトスンに戦争が始まることを暗示して語った「東風が吹いてくるよ」のことばの裏には、ロンドンの生活区域をもとにした、ロンドンの住民の「西(洋)高東

(洋)低」という意識配置があった。西洋の高い文明に対し、東洋からはペストやインフルエンザなど災いの種がもたらされた。そう見下しておいて、いっぽうで略奪を繰り返した植民地宗主国イギリスのダブルスタンダードが指摘される。

晩年のドイルは心霊主義に深く関わり、少女たちが撮った妖精写真を本物だと主張して譲らなかつた。これらの事態は彼の偏った傾向として批判されることが多い。著者はドイルの誤りを指摘しながら、娘ジーンが語った言葉をさりげなく引用する。「父のドイルは、この事件については完全に信用していたわけではありませんでした。ただ、どうしても信じられなかったのは、二人の少女たちが、こんな大切なことについて嘘をつきつづけているということだったのです」と。いかにもドイルらしい性格が立ち現れてくる、実にバランスの良い記述である。かく論じられて達した、ドイルは偉大な人物であったのではなく、「愚直」に人生を歩み続けた人物だったとの結論にはまことに同感の思いが深い。

英語に堪能で、本場の資料を読み込んだ著者の提示する論には説得力がある。ロンドン在住時代の河村氏は当地のシャーロキアン団体、ロンドン・シャーロック・ホームズ協会のメンバーとして、生粋の英国人たちと対等の立場で活躍した。その

ことを軽妙に描いた『われらロンドン・ホームズ協会員』(一九八八年 筑摩書房)は実におもしろい嗜好だったし、『シャーロック・ホームズの履歴書』(一九八九年 講談社)では日本エッセイスト・クラブ賞を受賞したほどだから、氏の文章には定評がある。ここでもその魅力は変わらない。さりげない筆致の中に、ドイルの生涯に関して重要なことはすべて記されている。記述の巧みさに舌を巻く。見かけの軽さにだまされそうだが、実にしっかりした内容を持つ本である。

今日の国内のシャーロキアンによる研究は一見にぎやかなようであるが、その半面、独善的な見解の披瀝の方向に向かっている嫌いなしとしない。その解毒作用のためにも、むしろ今こそ海外の研究を改めて見直すべき時である。日本人として最初の世界的シャーロキアンだった長沼弘毅がかつて果たした、海外の研究の紹介者の役割を河村さんにはぜひ務めていただきたいと、あえてお願いしたいところである。仄聞するところによると、著者には、この内容を大幅に書き替える計画があるそうだ。豊富な資料を持ち、読み解く能力の高い著者のこと、刊行された暁には、ドイル像が一新される著作となることであろう。それを読む楽しみを心待ちにしたい。

(なかにし ゆたか 文化創造学科)